審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	乙 第 2815 号	氏名	江森 啓悟
審査担当者	主 査 鹿毛政義 (印) 副主査 吸本照夫 (印) 副主査 中村桂一郎 (印)		

主論文題目：Balloon-Occluded Retrograde Transvenous Obliteration versus Endoscopic Injection Sclerotherapy for Isolated Gastric Varices : A Comparative Study
（孤立性胃静脈瘤に対するバルーン閉塞下逆行性経静脈的塞栓術と内視鏡的硬化療法の比較検討）

審査結果の要旨（意見）

近年食道・胃静脈瘤からの破綻性出血に対する治療法が開発され、今日では内科的に止血が可能となった。孤立性胃静脈瘤(IGV)に対する内科的治療法として、バルーン閉塞下逆行性経静脈的塞栓術(B-RTO) と内視鏡的硬化療法(EIS)があり、両者の有用性は臨床的に明らかであり、広く普及している治療法である。ただし、この２つの治療法について優劣を比較検証した報告はなかった。本研究により、B-RTO 群が EIS 群に比べ、治療回数が少なく治療期間が短いこと、さらに治療後の IGV 再出血が少ないことが明らかになった。また、両群間で食道静脈瘤の増悪率ならびに生存率に差がなかったことも新知見といえる。IGV 治療における B-RTO の有用性を明確にした本研究は臨床的に意義がある。

論文要旨

孤立性胃静脈瘤(IGV)は食道静脈瘤に比べ出血率は低いが、より致死的である。最近、IGV に対する治療として、本邦では Cyanoacrylate や Ethanolamine oleate(EO)を用いた内視鏡的硬化療法(EIS)とバルーン閉塞下逆行性経静脈的塞栓術(B-RTO)が広く普及しているが、今回この２者の比較検討を行った。対象は IGV 出血例に対し治療を行った 112 例で、B-RTO は 49 例、EIS は 63 例であり両群間で治療内容や治療後静脈瘤出血率、IGV 再出血率、生存率、死因、合併症に関して比較検討を行った。また、治療後の静脈瘤出血と生存に関しては多変量解析を行った。その結果、B-RTO 群は EIS 群に比べ EO の使用量は多いものの、治療回数や治療期間は有意に少なかった($p<0.05$)。治療後の IGV 再出血は EIS 群において有意に多く治療手技のみが独立した規定因子であった($p=0.024$)。食道静脈瘤増悪率は両群間で有意差がみられなかった。生存率に関して治療手技では有意差は認められず肝細胞癌の存在が予後を規定する因子であった($P=0.003$)。IGV の消失効果と再発・再出血予防には B-RTO が EIS よりも有効であることが明らかになった。